



Title	形式名詞を資源とするモダリティ助動詞の統語語用論的研究
Author(s)	張, 力丹
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16667号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16667
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98277
Type	doctoral thesis
File Information	Lidan_Zhang_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 張 力 丹

	主査	教 授	加 藤 重 広
審査委員	副査	特任教授	佐 藤 知 己
	副査	教 授	近 藤 浩 之

学位論文題名

形式名詞を資源とするモダリティ助動詞の統語語用論的研究

当該研究領域における本論文の研究成果

日本語を対象とする言語学的研究において、モダリティ(modality)が正確に理解され始めたのは概ね 2000 年前後であり、それ以前はムード(mood)との混乱や取り違えがあって理解の基盤そのものが十分に確立していなかった。そのようなモダリティ研究の中であって、1980 年代から 1990 年代にかけて先行していた枠組みの考察や述部構造や文構造との関連性、認識のモダリティやその発話内力(illocutionary force)の研究とは違って、比較的記述や考察が遅れていたテーマが「ものだ」「ことだ」「わけだ」といった形式名詞と繫辞(copula)を資源とする形式であり、本論文が主に取り上げて論考の対象としているのはこれらのシンタグマ(syntagma)である。先行研究がこれらを統一的に論じることは少なかったことを踏まえると、モダリティの枠組みやその形態論的な記述、意味機能と発話内力の関係、意味の派生と統一性、シンタグマが持つ推意(implicature)などを含めて多角的かつ統一的に論じた研究成果として、本論文が重要な意義を有することは否定できない。これまでの研究成果が前世紀からの主流の流れを組む日本語記述文法の成果であることを考慮すると、語用論の知見を活用した統語語用論的な研究である点にも先駆性が認められる。

形態素まで単位を分解することを原則とする学校文法ではこれらのシンタグマは助動詞とは認められていないが、研究文法上はモダリティ助動詞と認定すべき意味機能と形態論的特性を具えていることを論証しようとした点は重要である。このことは、例えば「～するものだ」の否定形が「～しないものだ」と「～するもので(は)ない」の両形式が意味的対立を形成しながら共存していること、「～わけだ」の否定形「～わけで(は)ない」が「～わけがない」との明確な対立性を有しながら存在していることなどは、これまでに個別に指摘されていることだが、これらを全体的かつ体系的に対照して整理しようとしている点は評価できる。

意味機能については「ものだ」が一般性を原義としており、それを共同体における良識として実現させようとする義務が派生し、過去事象の複数回性が回想の解釈に分化するとする説明は相応の説明力を持っている。また、終助詞(本論文はこれらを伝達モダリティと見なさない)の「もの」「こと」が形態論的に、形式名詞の「もの」「こと」から分離していること、その一方で、助動詞シンタグマの資源形式には形式名詞の体言性が残っていることなどは重要な指摘であり、今後の品詞論にも周縁的でありながら貢献するだろう。これに対して「わけ」は終助詞のように見えても接続助詞的に節の接続を実現する機能が認められること(これは一般言語学的には副動詞(converb)に相当するが、形態論的には主節として独立するという、二面性を有する)をその差異として指摘した点も新しい成果と見ることができる。また、構文推意をこれらの助動詞が持つという指摘(別の助動詞類については先行研究が指摘しているものの、本論文の対象とする形式では初と言えるだろう)も非常に重要な成果に数えることができる。

学位授与に関する委員会の所見

上述のように、本論文にはいくつもの先駆的成果が含まれ、それが今後日本語を対象とする言語研究において取り込まれて行く可能性があるものが少なくないと認められることから、その意義は確かである。一方で、多角的・多面的に分析し、考察しているため、論述の構成がわかりやすい形になっていないこと、果敢に新しい成果を上げようとしているものの結論に至る部分で慎重になって断言を避けて踏み込めていない点が散見されること、その結果、完成度を高める余地が大いに残った論述となっていること、などの問題点が口頭試問の中でも指摘された。この点については著者も十分に自覚しており、今後の論文などで改訂していくという考えだと委員会も理解したことから、深刻な問題点とは見なさなかった。日本語を母語としない著者が母語話者でも混乱しそうな細かな差異を含む言語事象を分析した努力も看過できないが、このテーマで文法現象を俯瞰的に捉えながら、平行して非常に精密な記述と分析をおこなっている点を委員会では高く評価した。それは、日本語研究のみならず一般言語学的な研究にも資するであろう成果（「ものだ」にアドミラティブ(admirative)と見るべき機能があるものの、他の要素との相互作用によって生じていると分析していること、など）や、従来の研究の地平にとどまらず広範に文法事象の分析と解明をおこなっている点（モダリティ助動詞の重畳という、その煩雑さから先行研究があまり論じていない現象を解明しようと挑んでいること、など）にも反映している。

以上を踏まえて当審査委員会では全員一致して、本論文は博士（文学）の授与に値するという結論を得た。

以上